關西大學新報

発行所
関西大学新報社
大阪市大淀区長柄中通2
電話（358）2271
発行人　大月　基
編集人　大月　基
（一部10円）

古書籍全般売買
天牛本店
道頓堀中座前
電話（211）二七五八〜九番

幻想としての"大学の自治"

大衆不在の自治委員選挙

恒例の自治委員選挙をめぐって天六における民青（全支）と体育会との二元支配のもとでの抗争の中で、反民、反体育として、中間的に位置づけられている〈一般大衆〉といわれる学生の存在を表出され得ぬままに、一般学生にとって旧態依然としての〈自治〉の内容が残されたままに今回の自治委選は幕をおろした。

〈自治会〉そのものが、すでに形骸化されたものとして、学生を代表するものとして存在しきれず学生の生活を根底的に抑圧している現在の〈大学〉＝資本主義体制に対する「力」としてはあり得ず、むしろ欺瞞的に〈学生を代表するもの〉ということによって二部大学の管理体制下で抑圧されている学生のエネルギーを収束する下請け機関としての「学友会」の存在があるといえるだろう。

天六二部における自治委選の内容は、依然として体育会かさもなくば民青かという二者択一式に行なわれ、どちらがまず〈自治会〉における主導権を握るのかという抗争形態で展開されていき〈一般学生〉は、そのどちらかに票を投じる存在としかあり得ず、〈自治会〉の形骸化を明確に把えた学生は目的意識的にボイコットしたであろうし、あるいは無関心層の存在も必然的なものとして把え得ることができる。

「反暴力キャンペーン」によって、あたかも自己を正義の守護神かのように振るまい、いっきょに今回の自治委選におどり出て、半数の議席数を占めた民青は、〈学園の自治〉の幻想にしがみつき、今日的大学の根源的問題を触れ得ぬままに自らのセクトエゴイズムをむき出しにして"自治委選"を自らの組織拡大策動の場として欺瞞的大衆操作を行なっている。民青系勢力の体育会に対する切り込み＝民主主義擁護（ブルジョア民主主義）の名目の下に、現象的にしか体育会による暴力を把えることができず、自己を絶対化することによって排他的に〈大衆〉の存在を見ず、諸要求貫徹路線上に闘争の瑣少な形で設定し、体育会の暴力が悪いのだという―によって体育会勢力は現実的には後退している。だが、これまで体育会勢力に対して意図的に拍車をかけ、恫喝をもって学生を抑圧してきたところの黒幕は何であったのか。二部における管理体制は、根源的に何を持って打倒し得るのか。

六八―六九年の学園闘争によって暴露された〈自治会〉の不毛性・大学自治の幻想性は、天六において実感として把えられている。二部のおける学生の諸欲求が、現在の抑圧体系のもとで〈自治会〉においてどこまで闘いとることができるものが、学生の問題をどこまで展開していけ得るのかと反問されることとによって、明確に大学の〈自治〉の無能さを把えかえすことができる。むしろ、天六における〈自治〉の内容は、明らかに大学当局＝教授会自治＝体育会自治の下に抱摂されており、その裏がえしとしての日共＝民青の組織拡大策動の為の内容しか持ち得ず現実的に「体育会」か「民青」かという内容でしか〈大学自治〉を語り得ぬ状況である。

〈二部大学〉という特殊性故に二重的抑圧を感受する我々が、主体的に根底的に自己の生活をみすえる時、体制（資本）の論理のもとで学生生活を送ることを強いられている現実を認識し、いっさいの桎梏として迫ってくる問題がどこにあり、我々の目の前に敵対物として表出されてくるものが何であるのかを追究していかねばならないだろう。

二部大学での学生生活を通じて受ける矛盾感覚をいかに止揚していくのかと課題は、個別改良という「日常生活」の物理的解消によって歪曲化されつつある。物取主義に陥いることは、根底的なる問題の解決とはなり得ないし、むしろ欺瞞性の中で、ますます体制から逃れ得ぬものとしていっさいの〈権利〉・〈主体制〉を放棄することを強要されていく。

〈天六〉での抑圧体系は、大学当局を頂点として、「学友会」に至る末端機構までの管理体制であり、今回の自治委選で如実にみられるごとく、〈一般大衆学生〉の存在表出すら許容しない〈大学自治〉であることは歴然としている「民青」、「体育会」との二元支配の下で、〈大衆〉の存在を許さなかった管理体制に対する"不満"として、新たなる萌芽形態での「形骸化された自治会」批判という形で微温ながらも、主体的学友の中から流動が起りつつある。この情況の中で、〈大衆不在〉の不満を止揚しつつ、民青―体育会の二元支配を突破するものとして、今日の大学を根底的にとらえかえし、自らを斗う姿勢をとる組織の形成へと早急に向わしめねばならないだろう。そして、そのことは必然的に〈大学の自治〉の幻想性を打破しきるものとして新たなる学生＝大衆の自己形成であるといえる。

論説

変革への視座の確定とは

〈大学〉の虚構性と抑圧構造は学生の主体的行動によって白昼下に暴露された。歴史的にみれば早大、明大、中大、関学闘争の大学の告発、自主管理闘争としてあった。これは大学の日本資本主義の分業体制の一つとして存立していること＝「大学の自治、学問の自由」の普遍性が現実の資本制中では相剋した緊張関係があり、まさに幻想でしかありえないことが不問されることによって、大学、学問への内省が行うことに規制力としてあり退行した―への「反」装置の創出であった。

これは、砂川、羽田、佐世保三里塚、新宿闘争の日本資本主義の変節の焦点への政治的、街頭的攻撃との結合により、〈日大、東大、大学総反乱〉として、その「反」装置の弱さを克服し、政治的闘争として闘いうる行動体を持った。そのことによって〈大学〉は解体されたのである。この過程をまずふまえることが今後重要となり、大学改革のオシャベリ談議にふけいることとの犯罪性を観透し、大学共同生活との関係をとらえかえすことが必要といえる。

大学へ入ることとそれは生活＝現実的には物資獲得競争過程で、下層のものに屈せずに優位に立つために、自ら分離＝分断する行為として入試の門をくぐりぬけ、単位取得し、送り出されること（卒業）を目的としている。この無意味性の犯罪性は、日本資本主義の個人解体政策の一環として貫徹されている。

国家、独占資本の小学校新指導要領から大学改革のプランまで、教育の内容を向上させるという名目のもとで人民を分断し抑圧する一貫した体質の構築しうることに我々は注目することが重要である。さらに大学において教授が学生を単位と試験と就職によって抑圧しており、自治会なるものが学生を代表しえず、抑圧体系のもとに学生は階級解体の「生活」の習慣ずけられている。

この〈構造〉は、学生の主体的行動への原理的暴力的装置の対置粉砕、テロリズム的洞喝、感型な中傷を浴びせるといったことに表されている。

〈二部〉に学びにくる学生の大多数は、現実的にこの〈構造〉の中で「生活」を強いられているのである。企業、職場、地域の社会組織の下での、人間分断、差別制可酷性のもとに表現しきれぬ苦渋、無念の痛みを所有している、〈二部に学びにくる〉という場合、二重の意味をもっている。ひとつは、この階級解体構造からの自己のみの脱却―大学卒業資格取得―階層（?）の上昇を夢想へ向わせしめること。自己のみの脱却してれは利己主義と批判し切れるへ構造〉と〈生活〉の深い関係を物語っている。

更に、資本制が要請する直接的、可視的利害関係で結合した企業、社会の虚構の共同体からの自然的脱却として「新しい共同体」を〈大学〉と幻想し、幻想することによってはいってくる。この〈民衆の生活〉そのものは国家、独占資本の階級解体と衝突せざるをえない。そこで、大学、国家、独占資本は、この〈二重性〉を逆手にとって―現実的、物資的欲望へ収約しうることによって―抑圧体系＝管理秩序を貫徹しようとする。そこで、"尊大"に振るまうこと、教育者が支配者的に、学生を〈学ぶ対象者〉に固定し、〈学問〉の運動性を圧殺しきれた。

であるが故に、学生の大学、教育者への"不信"は根底的である。階級解体の現実が、進歩性＝近代性、学問の名目のもとに、学生大衆操作の具として学友会、サークルの存在などを許容し、擬コンミューン擬サークルを制度化させていることである。

私生活の組織化、余暇の管理抑圧によって階級解体を押し進め、いまや意図的に無関心層を量産せしめることを、教育体系の機能と化している。

資本主義下の〈大学、学問、科学〉―〈生活〉の矛盾した関係が如実に、広範にあらゆる生活次元で見出される。生活次元への内省をせまられていることであろう。

〈全共闘運動〉の総括と展望はそれに関わりを持つ者のみに課せられた。羊の十字架は行動性としての方向性を提示しうるのであろうが、我々には全共闘運動によって告知、現実化された〈もの〉を再度整理し、把握しうる〈問いかえし〉を行うこと、それが〈生活〉〈科学〉〈大学〉の簡略への〈問いかえし〉であり、現実の変革への視座を確定しうることができる。

乱気流

▼大阪は"赤軍"発生の地であり都市ガスでの攻撃とまさに大阪の乱＝大塩中斉の叛乱の感あり、旧時代は終焉を告げるため、変革の時代突入の烽火を燎原の野火と化せ！とあるマンガティックな大阪ナショナリストが喜々と弁じた。

▼政府は「よど号」の乗客の人命尊重＝人道主義の見地から判断がせまられているギリギリの極限だとの時点は二日間同じことばを繰返すことによって、人道主義を歪少化した。人命のギリギリの極限とは二日間の余裕があったことなのだろうか。人命とはかかる程、余裕のある代物だったのだろうか

▼政府の「北」からの攻撃のデマゴギーなど「北」への敵対、更に革命的左派への"魔女狩り"的政策"それは米・日・韓、マス・コミ、日共の「統一戦線」の形成に人命は玩具と化したといえないだろうか。人民主権と国家の矛盾的関係が如実に暴露された。だから政務次官の「帰還」に大臣が出揃い、"芝居"をする仲間意識はあるが、「乗客」を出迎えするということは支配者階級にとって決っして行えない。人命軽視政策、「北」への攻撃、暴露された安保体制攻策をとった"後めたさ"故か。この点が、二十世紀後期の特色だ。

▼人民と国家の矛盾関係では、天六での都市ガスの爆発でも示された。"進歩と調和"の大都市整備、開発そのものは、現実には人間がそこに存立しえず、万博にみられるように巨大な建築＝物体による"巨大さ"＝経済大国の＝誇示、支配者層の"力"、"尊大さ"の誇示の発想は、人間の生活そのものを根底から破壊している。日常性の秩序の進行に〈死〉の影がになりあっている。〈死〉の陥没が待ちうけている。公害は物価高騰と同じく日本資本主義の成熟のもとにあらゆる領域で進行しており、企業、政府は「糊塗」策は持ち合せても、本質的「解決」策は持ち合せることはできない体制を破棄する以外に人民の生活が尊重されないことをよく認識しているからである。

▼このことは、教育の場と規定する大学その構成員の一員、教員層にも見られることである。学園闘争の進展が直接的に介在したとしてもその退行現象は、大管法での大学自治故の妄盲性が周知されてはいるが、学問は時間的累積の領域であるが故に、〈現在〉をとらえることができえずに、実証主義を止揚しきれずにいる。であるが故に常に保守性と"とりこ"と化せさるをえない様に学問は"悪魔"でもあるのだ。立体的〈現実〉をひからびた過去の累積から解放することが、戦後民主主義教育に課せられた。が、戦前を封建的、前近代性をとらえ、戦後はこの政治的解放をもって対処したが故に逆に内的＝学問にした。その後、茶番劇が演じられている。

▼式には、新しい世代はそのエネルギーを持って常に新しい未来を創り出せよ＝老人を越えよ！と、少なからず青年を生理的に若いということで鼓舞したが、広瀬学長代行以下は先人＝老人のいうことをきけ＝大学当局に反抗、異議申立てを行うな＝さもないと退学処分するぞという"父権"の復活宣言を行うという学者としての識見が疑われる以前に、かかる前近代性そのものは、進歩性のもとに抑圧され、今我が時を物理的暴力装置のもと「解放」されたとでも思い違いをしているのであろうか。

▼この"父権"復活宣言は、最近多くなってきた付添いの父兄を喜こばしたことだろう。我々の生活の周囲に"混乱""倒錯"した現実があぶくの如く煮沸している。

▼三里塚、北富士にみられる闘争の武装化、ラディカル化をマンガ的に表現するのはブルジョアジー代々木にまかせておき、この農民から〈土地〉〈労働〉＝〈人間〉を奪い去る国家への対決しうる力へ、日常性の習慣の力を変革して闘う過程＝農民の生活を追求していき、〈生活〉を観透することが我々に課せられた内容だろう。そうでないと、ただ物理的勝負に還元する時、人間の行動の営為をみることは絶対にできないだろう。独占資本の「反動性」と「管理化」の進行のなかで、我々は"主体者"への奪還行動を媒介とし、他者への従属を拒否すること、その組織体を創出することが、今問われているだろう。

三里塚の冬

土地を、生活を、労働を、人間性を奪われた農民達は発見した。法とは何かを。自分達が、今迄国家権力から与えられた死を生きて来たことを、今、彼達は農地と対話する。目の前に横たわる大地そのものが法に裏打ちされた私有地ではないか。

七月上映（予）　小川プロ

新入生の手記

犯罪性の止揚と

新たなる価値の創出

六八―六九年の東大、日大闘争を頂点として全国いたるところの大学で全共闘運動を主体にした学生によって、今日的大学の在り方が根底的に問われ、我々の目の前に全共闘運動は大学幻想共同体を暴露した。それは、自己の人間としての主体性の確立、あるいは自己の人間としての主体性、存在意義を根源的にとらえかえし、探究する場ではなく、まさしく工学部系を典型とした産学共同路線の延長線上にある日本資本主義体制下におけるブルジョア政権延命機構以外のなにものでもないということである。マスプロ教育にしても、産学協同の路線上必要的にありうるべき形態なのであろう。

我々は、今日全共闘運動によって暴露された大学の虚構性と、大学に入ることの犯罪性をとらえつつも、あるいは根底的問題と意識しつつもそして現在、我々には、確固たる実像はおろか、すがるべき幻想も憧憬もないままに、入学してきた。

新入生を襲うマンネリ化した空虚と絶望感は結局大学とは何かという根源的、かつ我々が追究していかねばならぬ問題へと帰着していく。我々は、そういった問題を基礎にして大学を新たに創出いかねばならない。それは、自分たちの手で造る以外に方途はなく、学生の自己解放という根本的問題をふまえ、かつそれを目ざした闘いである。その認識もなく、ただ単に「学園の民主化」という美文句を並べたところで、それはすでに形骸化されたスローガンを掲げているにすぎず、まさに欺瞞であり一般学生を嘲笑するものに外ならない。刹那的快楽を求めて生きることが唱の文句ではないが、一番賢く、またしあわせな生き方であるかもしれない。しかし、われわれは危機を知りながら、手を拱ねていては、いられないのである。

機動隊導入三原則の確立が示す体制に密着した関大においては、それは至難な「わざ」かもしれない。しかし、中国の古いことわざ「千里の道も一歩から」が示すように、その第一歩を踏み出さねばならない。この混沌とした現代というカオスからわれわれは大学を生活を、そしてわれわれ自身をみつけ出し、創造せねばならない。われわれのパトスは、老けこんで、したり顔をしている他人まかせを断固拒否するものである。

七十年というあらゆる意味を含めた問題を、単に言葉だけで終わらせたりしてはならないのである。闘う先進的学友を主体にした自治会を結成することが、当面の我々の課題であろう。単に「民主化」の立看板で何かできるのだろうか。

エンゲルス研究の視点

「思想」三月号で、杉原四郎教授は、「エンゲルス研究の動向」という論文の中で、一九五〇年代以降、マルクス主義についての外国文献で、エンゲルスに関するものが、以前のように生誕記念にちなんだものとしてではなく多くなっていることをあげている。そして、資料として(イ)手稿、抜萃ノート(とりわけドイツ史など)(ロ)往復書簡―晩年のエンゲルス(労働運動の指導者として、「資本論」(編集者としての(ハ)著作の新版―新訳(とりわけ「将軍―エンゲルス―軍事問題と「自然弁証法」)(ニ)人と業績の全体像をがこうとしたアンソロジー

一方、エンゲルス研究の基本視角として、杉原教授は、ソ連、東独―東側陣営に共通するもの、英米、西独―西側陣営に共通するものとに識別があり、前者は「エンゲルスのダマルクス・レーニン主義に対しても意義が強調」され、また「マルクス、エンゲルスの一体観を擁護するために、エンゲルスの唯物論が決してマルクスのそれを異質なものではないことをとくに強調」して「正統的エンゲルス観」を保持しようとしており、そして、(イ)「エンゲルスの晩年期における思想形成にとりくんだ四人の労作」(ロ)「エンゲルスの経済学的業績に関するソ連の研究」(ハ)「各国の労働運動ないし社会主義運動史から見たエンゲルス研究」があるとしている。一方西側に共通する視角は、初期のルカーチやコルシュに由来する思想」で「その最終にあれは、エンゲルス主体と資本との関の弁証法的な動的関連を見抜きえず、マルクスの思想を平板な機械的唯物論に後退させた」とし、さらに「マルクス主義にとって幸福なことは、本来マルクスとは思想的体質のことなるエンゲルスによって体系的な観念が書かれ、それによってマルクス主義が普及したことがあるとし、それは、カウツキー、プレハーノフの客観主義唯物論の源流でもあるとするのである。そして、エンゲルスとマルクスとを区別してあるということが西側―すなわち、スターリニズム・レジーム以外では一般的だというのである。そして、例として(イ)福音派「マルクス主義研究」新版のボルノーの論文、(ロ)リヒトハイムの〈エンゲルスのリボリューションとエヴォリューション〉説、(ハ)ホッジスの「エンゲルスの科学主義、客観主義一に対する批判、(ニ)マルクスとエンゲルスの弁証法把握を対比したもの、をあげている。

こうした、エンゲルス論の試みは、私たちにもっとも近いところでは次にもとめられるのではないか。

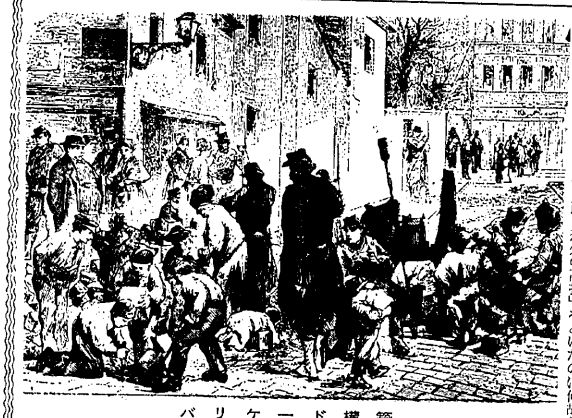
「安保闘争において全学連は既成政党の無能というよりは、闘争の質的発展の意識的回避の中にあって何とかして局面を主体的に打開しようと、独自でそのための戦術を追究した。」(安保闘争の政治理論としての総括「政治過程論」)

決定的に新しい歩を踏み出した革命派はやはり新しい革命論の構築を自らの手に求められた。

「経済的には『高度成長』といわれる好況局面にありながら『予想外の破裂』をとげたのは何故か。また、『そこで政治過程の独自の運動法則を捉えることができず、政治情勢の急激な展開の可能性についても測を、従って政治闘争における決定的な時点の把握』ができず、旧来の教条主義が、日本のマルクス主義が横臥し、決定的な自らの革命論を自ら構築しなければなく、共産主義運動をあらたに組織することが問われたのである

コミンテルンのスペイン革命―第二次大戦―ハンガリヤ動乱に至る一貫した運動―展開的な、被支配階級の立場にたつのかという視点さえも冗落させたジグザグは、多くの革命的大衆を虚殺するという犯罪的任務を負う。日本のマルクス主義運動も、そうしたコミンテルンの問題をジグザグすることでしかなかった。しかしながらそうした権威の失墜は隠しようもなく、ソ連共産党第二十二回大会統制委員会議長ジェレーピン報告のスターリン批判を向える。解体期のスターニリズムは、一方でイタリアートリアッチなどの構造改革派を生みだしているが、とにかく、そうしたマルクス「解釈」ではなく、マルクスの批判の方法が復権されなければならない。エンゲルス研究はスターリン「唯物弁証法と史的唯物論」が重要な典拠とした「私有財産、家族、国家の起源」「空想から科学へ」等々筆者であり、たとえスターリンがコマギレ的に自らの自然哲学うえにねじこめたにしろ、一方でやはりエンゲルス自身の哲学の問題があるのではないかというのが問題の一視点だろう。

もっとも、ロシアマルクス主義―後期マルクスに対して、初期マルクスを対置するという方法またドイツイデオロギー編の問題点その時点におけるエンゲルスの役割、やはり、マルクスとエンゲルスは、一応独立した思想家としてあつかわれるのがよく政治的にエンゲルスがこういい方をしていたにしても、思想をあつかう方法であるともいわれる。初期エンゲルスの像を明確にすることによって、あらたなマルクスの像が逆に私たちの前にあらわれることによって、決定的な地平を行く、共産主義運動の一つの基礎になるだろう。



バリケード構築

内的因子としての朝鮮

〝魔女狩り〟の持つ構造

〈朝鮮〉は、〈日資本主義〉の構造にとって不可欠因子であるが日本の民衆にとっては意識（政治的、社会的関係）において〈遠く〉なっている。いや支配者階級の教育、マス・コミ政策として意識的にネグレクトしている。その当然の結果として〈朝鮮〉を把握し、実体化―因係しりえずいる。

中朝共同声明の〝日本軍国主義粉砕〟宣言、数々のアメリカの「北」への軍事挑発、〝赤軍〟による「北」と安保体質のえぐり出しなどの政治的諸現象は、〈朝鮮〉それが政治的、社会的に〈ベトナム〉と同等の内容を持ち、それ以上の時代性をもつものとしてあるということを、全世界の階級関係に告知している。

とりわけ、日本資本主義の人民排外主義、国家主義的私的意識への収約し、東南アジアへの進出構造の裏腹形として〈日韓条約〉があり、これは、世界総資本の表現でもある、東南アジア支配のための人民、階級闘争抑圧政策＝出入国管理法案として出されている。

この日本帝国社会下の抑圧の犯罪性は、ベトナム反戦闘争＝日帝打倒闘争への成熟過程での金東希それが政治的、社会的に〈ベトナム〉大村収容所、「韓」国人被爆者、金嬉老、朝鮮人学校の認可などの問題にみられる。この問題をとらえる論理的な軸が設定されていないのである。日本帝国主義政策下の朝鮮人の被害の現実をネグレクトすることによって、朝鮮人の「刑事犯罪性」を強調する〈魔女狩り〉によって、〈労働者階級〉の連帯、成熟を分断、阻止し続ける抑圧体系がそこに源泉と質徴しているのである。

〈朝鮮〉における体系としての革命の成熟は、アメリカの一貫しかつ帝国主義戦後政策に対決するという構造をもっている。これは、ベトナムの革命闘争の成熟過程と共に、ベトナム、朝鮮の統一がアジアにおけるトータルな変革、〈世界革命〉への展望を、現実化しきれる不可欠な〈関係〉をもつ構造である。

であるが故に、アメリカの東南アジアにおける軍事侵略政策はベトナムとともに朝鮮をめぐる一連の軍事挑発をとらざるをえない。第二次朝鮮戦争の勃発の事態をはらんだ諸事件―情報収集艦プエブロ号の拿捕事件―原子力空母エンタープライズ、自衛隊の戦後進出―三矢作戦、フライング・ドラゴン作戦、フォーカス・レチナ作戦、EC121撃墜事件などとして、日米帝にまさに人民、階級闘争抑圧体系の強権に狂奔せざるをえないのである。

そこに、〈民衆〉と〈朝鮮〉の距離からくる〈不安〉状態にブルジョワの卑劣な過剰なデマを恒常化させることによって、〈疑似狩り〉を貫徹させている。「北」における共和国の存立が、「平和」とは成立している。この確かな現実の関係をふまえることである。

六五年の日本の資本主義が「韓」国への急速に侵出していく資本主義の構造変化は、人民の抑圧体系の重層化＝国家独占資本主義の管理構造への変化である。

これらの視点を〝不明確にした〝米帝に従属した日本〟の機性を暗ることによって、自ら日本の平和擁護、反戦運動に〈朝鮮〉を欠落した。それ故に、〈国家〉への挑戦への突破口が延長された。

しかし、闘争の新しい質を形成するには〈沙川・羽田・佐世保・三重塚・新宿〉の外的因子と〈学生総蜂乱〉の内的因子の結合の形態をとることによって日本の階級闘争にとって〈朝鮮〉の内包する日本の資本主義が明治以降、帝国主義の編成にそって、〈朝鮮〉が日本資本主義の形成、成熟、落差過程の重要な内的因子として働き、あるという。朝鮮の土地、資本、資源、民衆の労働力など一切合財収奪することによって日本資本主義は成立している。この確かな現実の関係をふまえることである。

◇　◇

社告

新報社員募集

激動の社会情勢の下、今我々は、自らを形成する必要に迫られている。
主体的に、新聞製作・理論活動に参加する意欲ある一、二年生の来社を乞う。

地下BOXまで

関西大学　新報社

二部大学という、その独自性故に社会的には暗に分断され位置づけられている「大学共同体」に自

幻想共同体としての大学　その中における自己形成

らの生活の一部として求め、今年も新入生が入学してきた。いや明確に〈大学〉の虚構性と大学共同体の幻想そのものが暴露され、大学そのものが現代日本資本主義の分業体制の一つとしてあり、その大学に入ることの幻想性を自己矛盾としてとらえつつ、現実的には二部大学に学び、単位取得を自的として大学の教育サービスを買うなら学園生活を不可避的に送らねばならぬという構造を至上命令として個人に強いられているのである。

「大学の自治」「学問の自由」の普遍性そのものが、すでに幻想としてしかありえず、戦後民主主義の崩壊過程にがたから出された現在、形骸化された、学園内の「民主化」路線のスローガンのもとに「楽しく明るい学園」を、というマンガティックに、ヒステリーテックにいう諸君とは明確にちがって、新入生および二部大学に学びにくい学生にとって急務の課題としてあるのは、いかに自己の犯罪性を矛盾として把え、「大学共同体」との関係を明確化していくのかということにある。

スケジュールの内容は、四月の入学式、授業開始日を出発点として自治委員選挙、夏休み、前期試験お祭りさわぎの文化祭、後期試験卒業式といった具合いに、行事としての大学での生活が回転し、現在の大学の持つ構造としては、単位獲得＝卒業、特殊二部大学においては、大学卒業資格獲得という名目のもとに、大学の中で抑圧されている。そうした内容の〈幻想共同体〉としての大学の生活が、二部において、八時間の労働に対する抑圧＝不可避的に資本の下における生命活動も、自己体現も許さない抑圧構造を持つ職場、企業の脱出手段としてのものではなくして現代日本資本主義の下に、二部の苦しみを持たざるをえない状況でしかない。

〈二部〉大学に学びくるというその構造そのものが、自己を社会的に図として高く位置づける―大学卒業資格獲得―という自己目的の内容を持つが故に、卑まん的日常性の中に埋没していかざるをえず、つまりは大学入試の内容そのものも〝競争〟といわれる形において体制からの一貫した対個人としての分断政策としてある。小・中学、高校からのブルジョワジーの一貫した個人解体―階級解体政策の中で、大学入試という関確にその政策に包括され、さらに二部大学にあってはいっそうの分断政策の貫徹された中で、諸個人がバラバラに解体されている。

今回の自治会員選挙においては、あたかも、自治会そのものが、大学における共同体の代表をなしうるという外観を装い、歴史的に学園闘争によって如実に暴露された〝ボッダム自治会〟の内容を何ら解体、止揚することをせず、一方においては、選挙管理委員会の不正、またその逆に「正しい選挙を」という具合にしか、大学そのものの構造を根底的にみることのできない金権＝民青と体育会との二部大学における二元配のもとの抗争である。

〝大学の自治〟の普遍性にもの幻想性がとらえられ、〝自治会〟が、何ら学生にとっての〝力〟としてなり得ず、むしろ民青↑↓体育会↑↓大学側の学生管理、抑圧としての機能に果すものとして存在している。であるが故に自治委員選挙対しての関心を必要とする人民の内容は大衆操作でありもはや、「大学自治」が幻想としてしかあり得ない以上、今、要請されていることは、現代の大学構造を根底的に解体し、その構造そのものをなしている自己の新たなる創出と組織化そのものの創出である。